洲胄紗

五十三

私立善本圖書館
私立善本圖書館

多聞

細 巻名を初めとして毎巻巻頭にあり

盂蘭盆の事をのべ一族の法名をしるせり

けるくれどもとぢめくとあるもの是也

の中に四十八あり 細 基北六七巻のみありうげうの巻

の始と同じくして毎巻巻頭に法名をしるせり

く次の年月日をしるせり小野よりくしもの

ひ云といふり

代をさり伝教よりさき恵心

伝教よりさきさる河

海よみさくり 河 恵心

院源信大和國葛城

郡人父占部正親母清

原氏遁世後隠居横河

谷仍号横河僧都 細 略記

愚傳委元亨尺

書二

みさくりんありさく 細 源信伝教の母長谷の

観音の利生をこうて伝教

をうみたてまつりあり

れど初産よりつぐ

つせめさく 愚案ずる

死をまぬかれてさり又え

享二年書よハ詣高尾寺

求子母夢一僧子二顆

玉乃姫えく

うらのさりよりさり

久人 お宇治よりは河

梨さその知人の家さり

そのころ横川よりさく接川よりさく伝教さりいでて

いとしくさく 大尼 いそぢ

の母父十

乳 細 源信のいりこと母養の尼よ似さり

母よりさく 細 伝教の母

て 長谷寺へ孔雀経よ法花経をさり

ふ 細 伝教の母

さらあり 三 伝教の母

のさりよりさり人乃

てさぐりやをめて

ありさく

山ごもりの本いふかく
孟 三年籠らるれど母の病ひなれバ出給ふへしと 河ニ委 愚案 河ニハ悪心僧都の妹の縁ニ付僧都山籠するれバ京ニ出ぐるしとて西坂本ニ来舎して清義坊とたに地蔵を会じて蔵生せしむる古事等ニあるとぞ
みたけさうじ 花 金峯山精進ニハ後夜於庭前礼拝金峯山百度すと云々一段こもづく精進也 三 此家あるじ御嶽さうじしける故人死をいまはしむ それハ穢をのけるなり

なほいたうわづらへバ横川にせうそこしたり。山ごもりのほいふかくことしハいでじと思ひけれど、限のさまなるおやの、みちのそらにてなくやならんとおどろきていそぎものし給へり。をしむべくもあらぬ人のさまを、みづからも、でしの中にもげんあるしてかぢしさはぐを、家あるじきゝて、みたけさうじしけるを、いたうおい給へる人のおもくなやみ給ふハ、いかゞとうしろめたげにおもひていひければ、さもいふべきことぞ、いとほしうおもひて、いとせばくむつかしうもあれば、やうやうゐてたてまつるべきに、中神ふたがりて

うぢの院 細 平等院也 朱雀院の御領とあれど別の所也 但宇多院の御門御領なれバさもやうに書る也 河 花 李部王記ニ天慶八年十月十八日朱雀院宇多法皇被云宇治院萱原広被留後院ニ云々 今案朱雀院ハ寛平法皇と戸也 それを此物語の朱雀院ニ出ゐせらるゝ院也 師 此宇治の院也を僧都の知人ゝし
宿もりのおきな 孟 宇治院の留主の人ゝ也ねまかりしておやしき翁ぞり鼾居るるきへし 花
物まうでの人ハつねにぞ おほやけの人の宿をとるにや

れいすみ給ふかたハいむべかりければ、故朱雀院の御領にて、宇治の院といひし所、このわたりならんと思ひ出て、院守、僧都しり給へりければ、一二日やどらんといひにやり給へりければ、はつせになんきのふみなまうでにけるとて、いとあやしき宿守のおきなをよびてゐてきたり。おはしまさばはや、いたづらなる院のしん殿にこそ侍るめれ。物まうでの人ハつねにぞやどり給ふといへば、いとよかなり、おほやけ所なれど、人もなくこゝろやすきをとて見せにやり給ふ。この翁、れいもかくやどる人を見ならひたりければ、おろそかなるしつらひなどしてきたり

とろそろちろゝひ
るもして　細字治德を
うらへゝく僧都のりと
へゆくまくをる之　羅目
盍やとりの所みし

袖の所ゟそろえ　お人の
かくるやゝあるゝく

さりければそれぞれちかひをたてゝひきこもりてゐる
ところ先僧都（おそうづ）もとより後にいとゆくみちれ（僧都）
てゆきろしげる所々あとゝもそて大きこ
さら經をもあるぞの後このそろとよそひ（細 こゝめ尼もよ法う）
（法師とは常寺と二人也）それしあざらとゆすやうけうい所
ひとりおもよこしのあのようつきくしれ（細点）
程の下（げ）らう法師よ火をともさせて人
とよしぬこしろのさまいそそうかりう
とゆき木のしるしとよしげのもとう（浮身の袖よそれてうつゆく）
やとも入るろよおろさりのくひろごろさ
なぞとゆるかれは何ぞとしたよりて火
とあくるすゝそれはのゝ所そろさとぞく

しらのとありて
細 法師られぞくいふ俗人（ゾクジン）
身の毛さらさる之
の髪あり人なりでとし
そぢらうち所之 桜衆
みノ下られつさ袖の所よ
御輿のこびしのうち
ゆうござらうぞまこ
とよしらの毛あるとく
人のいふさうにそう
ごとろすどしてく　中略
盍 髪がありば立あがらん
としぶらめべきと身
の毛ぶらへきとし

さりこるゝの變化（へんげ）しくろかくしまか
いさんとてひとりはいまするおもとよ
みいもひとりハあるよられよりのぬりの（盍 一人ゝ云用よをまつをけといふ）
すんとひてやうのかれしぞくべき（細 退へき事と請く）
おんつゝりつきすよるほまりるうら（盍 下とひを事をつかうとらて）（あぶりのくし）
のとあるべくうらめづきらあらたに
の火とりしろだとえぞうろわすくあ
ふるきさ所してちくりてその所（お輿する之思ひ盍もまくゆとえさる）
とられハとはるゝつゝやとして大ちう（おかき）
木の根（ね）れいしてあらくしきさよぎうかそ
いとうちくめづしきことみるちる（大法の御也）
れ僧都の住坊（ごぼう）よはゝんきうせなしつげや

みつ一ツ　盂蘭盆の厨子飯（仏教の行）

細尼夫（人名）のようけもの

こう一ツ　六食物を備ふる

これ六人なり　三ツ言下

ものもうぬ人よ

この他のうらよ　盂蘭盆流し

死人となれていまう

こうよ　仏樹神　木神（日）

魑魅（日）魍魎（日）　雲谷響

あざむく　朝暮（日）　和名

又詩仏（人名）そうぶつ

けごひりこと　盂蘭

古塚狐ものがたり

中よ神境通（じんきょうつう）ともいふ　六通乃

ありさまに妖通（ようつう）報通（ほうつう）神

通などの差別あり狐

もあるさまざまの人を変化（へんげ）

もするを妖通といふ

歟（か）そもそも有よ

人よりくるい妖怪なる

通ともいふ又話（はなし）そ

のうて完全なる

もの因縁（いんねん）よりて

なるべきよりて果報乃

至（いたる）ところ声聞菩薩

仏なりの通をも神通

ともいふ凡（およそ）世の俗物

みうりてなくもうと

神変不思議なる通ハ

其中に二条の通ハ

よりぬ通理（つうり）ありさま

ハ狐ノ人の書

よりけるなり文集

とうへんげ（仏教の行）

ものうでうることんとともなる

の人よ変化（へんげ）

ぬ抱（だ）るとい者（もの）ともうけごもぎ

尼夫（人名）のこ

ものうりて

来（きた）のうへ（人名）

どもうれ

ありぐべり

はいそぐ

しうよ

ろうまぐろ

人なり

三仏教（仏教の行）

ておりて

盂尼夫（人名）の

ねこ

仏教のこと

紙本（しほん）のとうもろこし

会釈（えしゃく）のさげをうくるそれハ他の人ゆゑ四ツ人ぶち

うなりもの

うれいねこびまりそ

うよ　ここで四ツ人ぶち

仏教のこと

あやしうて時

ろうこともあり

ろうまぐろ　あやもあけそうん

のよそでこあいさうんとうよさうべ

つう宿りのおのこそうず山売（びこ）のこころを
いとおそろしう（細やどりうし）おやーのさ海よひろいを
しあげて出でうー。（法師の母）さうよいうこと女ぢうどや（孟宗竹）
ねのつうまうろう。このまれのくよおん。
はぐあやしきひざる人ーぜうみくーの
林もうよ仏うの人のみれおうものぐうよ
仏ーをうてまうでこうこうーうぐる。（法師ガ）
こゝ女ぢうそぐ仏うさ。そのちごんこうや
ちおーとうの人ぐいうこそ（着るう）仏うさ。狐（こゝ）いこそ
人をとびやうをぐ。こゝよとおーのやの
とうよさ海いうれこうの衆ゝこ系

うてぢちがあやーぬ
ねこねろうなのこのねま
いうえんとうるようあろ
ろやこ

この下のりんこの
孟傍郭を路志こ
お天下者一の路志こ

こゝ女のこうや
花大木の下よ日ろれ
よ本画の鬼とうのさ
ぢ
めこうこうもうこめこよ
細同ふー鬼のこをいる
ぢ伝文殊楼（モンジュロウ）の同無鬼
事元稽記は同鬼と
ぢこ元朱（シュ）の盤（バン）とう文殊楼の

ぢりのく一ぬよんをこうろうへべー傍郭
こうこべこうやこ
こよとて。この（孟信師行）
れべ鬼うぬ（法師行）称うこむうがごうの
あ天の下れうんざれかりまずみはえくれ
ぬこうぐ。（法師の母）ひけばう母をひこられこうふくい（法師行）
であるこぐれの本画のをうや。ぢこにう
くれうんやこひつ。海をこんこもう
よ。ろをうそうんめうをれもるろうろ。め
をうくやあうんこひこひこ鉄。のり
うういうこう海をんよこんこうをんこ

用の一器のみをもちゐ山法師のごとくいうこと勿れ細井広斯の入門の翌日なり

ひさぎをんとすれば法師の肉細井のみもめれしくあやしきまでに世よあしくてこそひとはいふめれ

池よりぐつを山よりくちをぐつよ孟子の言

人をとりて細井広斯の著門弟なり域を悪人逐とそうろうも損死業障より免れ孟子の言

人よりころされて孟子の言

人をころすものは人よりころされてもこれ自業自得果報なれば

この大ごとにておおよそ拙からせぬと

その余一二日よりもありぬべくいうこと勿れ

それ人よりころされてもこれ自業自得果報なれば

このたびゆるしたまへといふとも

ゆるすべからず

孟子曰

人皆有所不忍達之於其所忍仁也人皆有所不爲達之於其所爲義也人能充無欲害人之心而仁不可勝用也人能充無穿踰之心而義不可勝用也人能充無受爾汝之實無所往而不爲義也士可以言而言是以言餂也可以言而不言是以不言餂也是皆穿踰之類也

孟子曰

人皆有所不忍達之於其所忍仁也人皆有所不爲達之於其所爲義也人能充無欲害人之心而仁不可勝用也人能充無穿踰之心而義不可勝用也人能充無受爾汝之實無所往而不爲義也士可以言而言是以言餂也可以言而不言是以不言餂也是皆穿踰之類也

（花ろく）
よこすくいけろ人をろうあようろう
ろくをんいうごうこととろれいるぐごぐ
ようふだそるでいいとさいぐくねをうさ
ていひろすねろれいへさけぐうくぬう
くれのうくようんおをうろうはくろ海
ろをていうはほどいうくうぐうぐ結と
てのうろ。もうろうめうろ（法師伺）ようくうと
へいうぐうろうめうろくのみよくうと
めというぐず。いうり作ぐぞ。ようねよ
けぐぐうろへようとといおをいのう
ろの尼ぞいやて。伺ぐそうろ（孟伺知し）ろくけうと
をろんおく六十よおやうろう。ぬぐうろうねう

（細いろうとの尼ろし）
ろのぐ寺うてうーゆめ
ありうき
細寺しい泊瀬ろう
孟いのうとの尼その伺
ろうをようこうりて灵
灵をうろうろーを

（妹の尼ろし抄）
（伺ろの伺）
（法毎し）
（香し）
う我忘うりひやうとう
孟伺私のいうとい生ろ
修ようろへ人の書ゆく
ありうーがひもめやう
しうひて処ーこの伺よ
ろへをうて尼よろねう
うーてうろをひとも
ろ中将とう人の書そ

[illegible]
いるりてんもありさ風こゑ人（細砂そころけうくんと鬼やほぞとこうくをぢうを今女とこ定てのうそえじめのさ風をもそうぬ女房を遠谷そうくもそうぐいぐきへうと

赤そのはくめよ紙ん硯を硯うくくかねの赤よ續をえうてくじてくんと物のけをく調伏し

さ風こぬ人い地そうこでできれ（三浪舟のごとし）つ・いくやくみをめくでさすくめをなのくよこあげくよ・（尼去の如し）りのくまやいくろ人っかくてぬさ風そうり・湯（尼去のごとし）くよ・（浪舟のごとし）こくくよくて（浪舟のごとし）入やうひ（尼去のごとし）れば・ずくいくでさりぐうれて・（浪舟のごとし）ねみだくて・ぐ・うぐーまづくくひんぎの（血は俳とものの如し）れいぐそのやもさ拍あつ（俳教の如し）ひくですうくいんど・神るどのはあよをよくつ・いのう・俳教をさーのぞさて・いくみぞ（調伏しても）くてくーてさんと

てるのさ風をいくせよ
くぐうをうげぐくひよ盃とそも死ぬんぐ・よ・粗分の稼よこうらんくさうと

（浪舟のごとし）の給へど・いつ（佐俳生のものの如し）なれいえのくさ俳ぐよさしりそゆくやうこりてまどぐふべさ人よさて伯めれもよくりもさやいをてさを給ちんこぐ（細俳教のごとし）（尼去の妹の尼去のごとし）帰ものくひのう・あれう俗人よさそもさぐうくりそ（句ろう）ぬまづくつ・尼ぎいもやのようひ給ちを・ひ人をいけそてくうまかうりてひねもちぐぬ人なれどくめつよそひやくうかうれべでぐよう尼のこもうとくろ限あつうひさけぐさうさまぐよ

三 いるりんさうりそ
こ俳よさ人みそそひつ
り弟なそそんんと
きるやあんと

あやふくやつくりける
しとそふ人の
兄妹の尼のわりしむを
ものうりよろんとそ
ふくるるをやうん
三 浴舟のふくるるくるる
八ほやひのまこらんとそ

河ぐめぐりてみえ開こ花 孟月を見上こみえ
るぐるくさ 孟尼云句
ふ人のうち 尼云句
ふ女ゆうを ふこうひくくなりぬるぐ
ふこもやりうんさるぐき契うてこそう
くをもうらめるをいうくる和の語へうひ
づくれど 細きうの云の句
やもうさ 孟不用 師いうそをうるうと
この河よ 孟尼云句
よりふ まれくるの話をれうとやう
あるふうやいうれぐくの話ぞいうみ
てさる 浴舟 和も

人のふまでつうんとそぞ
そうろうの和うや 孟尼云句
四 俗色 遠人 花 着 超
三ノ云ニスル 云ニ樂 着
古堀 細 うのりのとハ文花
のおうとこ
二日ぐうりうて
孟字落 ほうこて
うう二日ぐうろうや 暁

故八文のかむもの
三 浴衣のうをうる
うり

ゐさうそう　細　法母の
葬送し孟法母を送
一夜のことしてふ
てあろう日れ秋さうそう
もーそのゆろう日れ知し

暁

そうの人のしゆもうを
三代人を八文のけむり
めほ母のまうあるよや
とやいうとくし
よべやうれ　細車を
やうてけーれごうせ
くとなれごとくくし
孟葬送の次第るよ三
さぬうご步を焼も
れいうや暁

てさほぎ作う。そのゆさうそうれ雑うぎ
つうまうら作うとて。昨日いえまう伯
らぎうまうとてふさやうの人のゆまるを。
母
暑のとうりてさうもやとふまろ
あうりめとをゆがえべおやうれ
とくくしろうくあうりてさうもやとふまろ
ゆそうしとぐくさうーれをこざう
いまうことゆふこと作うこそざて。いうあう
をもゆぎ作うこざうーとうをふげごひうろ人とて。
立るごうまうをひ色しの衣服いえのれむ
めう物線されをとふようん。姫そそとを

あまえまうまうく
孟尼云本儀中神を
あくし三儀物の母し

つぎのよい　次の車し
孟いうしこの尼の車に
法母とのせうういまし
うう尼云のやうに
師女房しや
をのとうふれうそ
伺小野の内大原村し
布薩とふ物まあう

中やどりをそまつくべりけるぞいと
て、東みけてかつつきぬ。侍教いかやとあ
つひむすめのあの病ぞいこのもゝぬ人と
なんぐてこそ、そ（大尼）（おい）
（大尼）（おい）の病ひのくすしれぞこれ
ひ給ひくれやう（侍教の母北方侍従）くもつかりぬよ
くれど、侍教いのぞりうもぬ。うち人なんそて
そうるぐ法一のあうみはまものづそ。尼
ぞとこれうちぐさめをつくり給ふる
人やあうとやみもびんすいそぐ

（侍教の母北方侍従）りゐうち人りや、孟人の
弟子そうとうそて、と
尼ぞの心（侍教侍従格の
序よりう

いそぐうゐ井人のそむ
あうよ（おぎ法のあ
ぞまうち人いあじめ
ぞそでの人れ宇治ぬ
よりてうぐうゐ
うと法母をぐ技をき
うとと

何よるてうとひ
孟浩弟の宇治そその一
言（おぎ法弟のいそぐ人
ぐうをさゐ

ぬ井人のそむあうよ。うち人ゆうあぶ
出ぞん。拍ぞうぐでるぐうちゐうぐでひゐん。をまぐ母ぞや
うの人のさぐうひゐん。をまぐ母ぞや
ぐそやうはぬ。物をそこよの給ぞぬい。
一ぞしうおうぞ。いつくいつち人ゐをな
いてぬぐうぬ。つぐくうてゐきあ
しくうんとやよ。つぐくうてゐきあ
ぐうもく。いてあやしのぞりの
まぐぐるよいくちぐさ人ゐやとりひ
ぬぐぐうすてんをいてりいつぐ。
（孟浩弟の宇治そその一言）細長公子その尼ぞの心
ぞぐうりー出くぞめうりいのこを

[illegible]
[illegible]
[illegible]

細約者の如き行ふよ
ハ平生の修練のありて行ふ
ものの如し

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゐうりのゆとうる
盃おい湯もまゐりうろ
が心のつくそうろうと
三ばゐの幸くよろうて
うろ念ろもゐのぞ
しこ
うらりへゆうこみう
うろいまあろひて
盃執気さゆうろう
三ばひのうこいうろ
ろこ

いつよう
つうん
ゐうう
ゐうて
しごう
いつう
まつう
こゐう
しつう
ろう
ゐへ
ゐむ
ゐう

いつこうねくて　おばゐ
のゑうこゑどもゑ
しているう念ゐれ
てゐうこと

いつこうもあろう
おゆうる様もゐり

ゐへゐりを　三ゑ戒尼
ようとうしゐりこ
ふりこうけまで
仰本をこうこねた
おばゐのん尼ようすゆだ
うろうゑふりとうこと

ひた引ならすをとも　引板之事也。鹿をおどろかす物也。夕霧巻にも山田のひたにもおどろかずと有
かの夕霧の　細　落葉の住所也
宮す所の地形をいへる也。此ハそれより奥にて有を如くみるべし。孟　此詞ハ双紙詞なるべし。浮舟の心をいふ詞也
山よりさしかけたる家
細　ひた引ならすの次にかけり。孟　此詞も浮舟の心なるべし。よしなかもおもひ出られてとよくつゞくべし。隔句なるべし。此山里のむかしのかくれ所也

小野の所也
くしたり。秋になりゆけバ空のけしきも
哀なるを。門田のいねかるとて所につけたる
ものまねびしつゝ。わかき女どもハ歌うたひ
けうじあへり。ひた引ならす音もをかし
く。見しあづまぢのことなどもおもひ出
られて。夕霧の御息所のおハせし山里
よりハ今すこし入て山にかたかけたる
家なれバ。松かげしげく風のおともいと心
ぼそきに。つれ〴〵におこなひをのミしつゝ
いつともなくしめやかなり。尼君ぞ月など
あかき夜ハ琴などひき給ふ。少将の尼君
などいふ人ハ琵琶ひきなどしつゝあそぶ

かくさだすぎにける人の
孟　年よりたる人ハ琴引て楽しみつけて昔をおもひ出す浮舟の心也
身をなげし　三　親なくともなき身をおもふ也。孟　かゝれゆく浪に身をなげしよりめぐる泪がはかなきことなりてとゞめしよ。身をなげきうらみてしかるべからずもあれバ涙をかぐるとよめりてしく

かゝるわざハし給ふや。つれ〴〵なるになどいふ
むかしもあやしかりける身にて。心のどか
にさやうの事すべきほどもなかりし
かバ。いさゝかをかしきさまならずも生出
にけるかなと。かくさだすぎにける人の心を
やるめるおり〳〵につけてハ思ひ出づ。猶あさ
ましくものはかなかりけると。我ながら口
おしけれバ手ならひに
身をなげし涙の河のはやき瀬をし
がらみかけてたれかとゞめし。思ひのほかに
心うけれバ。ゆくすゑもうしろめたく
うとましきまで思ひやらる。月のあかき

盃なる
[illegible]
[illegible]
[illegible]

よろづよのかず
世経ともかぞふるさへ
乱世ごもれりとや何と
おぼつかなき人をとふまで
かりがねをきくと
思ひやりてよめる
三尾丸の父の母めさ
てよめる

秋を契れる 細 菜の月
雨をうけてくさぐさうつろふ
を契りおきしの給ひ
とりわけてくさぐさ
ありしこと盃を尾丸のま
つりのかへりごとをとりて

中納言
秋ごとの 細 花の尾丸をよろづよ
のかずをかぞへつるかな
ありしの盃を尾丸の母
ふるさと人にとはるるかな
中納言
あるじとも
ありしこと思ひいでらるる
つゆかな

中納言の子の親分をまもりくれともうしでくるうれだ
中納言
秋ごとの 細 花の尾丸をよろづよ
のかずをかぞへつるかな
ありしの盃を尾丸の母
ふるさと人にとはるるかな
中納言
あるじとも
ありしこと思ひいでらるる
つゆかな

中納言の子の親分をまもりくれともうしでくるうれだ
あるじ 細 花の尾丸の
盃 尾丸の母
ふるさと人にとはるるかな
中納言
ありしこと思ひいでらるる
つゆかな

秋の歌乃 細 歌人の
ふるさとをあるらめ
ゆく雁の雲けさやきて
ありがほなる
盃尾丸の母の歌

秋ごとの 細 花の尾丸の
盃 尾丸の母
ふるさと人にとはるるかな
中納言
ありしこと思ひいでらるる
つゆかな

秋の歌乃 細 歌人の
ふるさとをあるらめ
ゆく雁の雲けさやきて
ありがほなる
尾丸
秋の歌乃 細 歌人の
ふるさとをあるらめ
ゆく雁の雲けさやきて
ありがほなる
盃尾丸の母の歌

さみをいそぐ
なりて又ゐ
きびつ
よ
りの
むし
ゐる
こえ
ぞ
と
ぞ

ひとより殊なりぬべし
三 業にあらはれんするは誰
しりも知りしらぬ枝に小さき
ちそ文をうつし時なるまで
ぬいこしかりし
花をりのや 三 手習の君
心ときめきを制すること
うらうじてなれすくを
こうて 細 引旨に及べ
つうじたるの春さ写て
母と思ひ知りさ物教
仏法ともまうらせしは長
秋の宮にまゐるべし
とも 花山寺のかりく
となしてゐまさけれ
うちそで思ふ母うでもゑ
ふ 行基寺 三 但氏書を
引うがまさてこそも秋の
あくるがれたと父母に
さんさうてこれは人の子は
の父母のうにむかう寺分さ
らしまたうべき人を
あるにこゑ八 掛に野乃
つれてゆくべきこともまも
わかくは孫ぞうなかり

さりぬべし。すずろにこの世にまどはれさ（三 業のすゑなり）
海士にもそうてよいつはらんとて
あさましうおどろかれのやうなるり（霞之）
とうへきうろひかとへさふかくう（白）
あぐくなのすくとうそ。ひくられし。母の
れ一条とうてしうんへ出していろすんと（一 孟子の言、家をうくうすをかへつとゑ）
思わしていうとりとあし。とこりて（こしさかさし）
まうろべき人もとふよこ月ばかり給
つうよいびきの人いひとうそゆかせてかゆる（彼らち丁すがひ先人て）
どむつうさらしぐり給りてそやしてお
まんようくうてめをうつしらりてそ以（先人母 三 未野へ粥をとくいふこと）
どまうすひもいとんづうさうくらうてそ（未野のそし 三 陪膳子がのうくしくうぬなり）

のみハ家内とも一人ハあり
くべらじに
けさうしてしさ法師ども
どうなかそて侍私ふかお
まさせ おか小野へおえせ
人とり

右大臣殿の四位少将
ハ右大臣の御子の四位少将
将 三 夕霧の息く

ちしぬらうてなやましくなどして（師こしらへる）
ひすふくとおろそいふをいとしうすげせ（三 無骨之ぶらうてうは海 なうさ事に 先人）
くちき法師どうなるどあまさうそて侍（なうくし）
私なふかりさせ給べしるすふちるにと（細 宮の君人の身は向之）
ゑふすれば一品宮のれりかくけるうやま（下総の国分上丸一品之）
を給うて山の座主されば法つりまうらせ毎（ざす）
へどおすそのうけまつくを給りくいまうし
すしとそのふこうびおんめし待り右大臣（さ）（夕霧之）
殿の四位少将よべ夜ふけてなんのぼりお（の）
つきま給の宮の御かたに参りて侍るまれ（三 御かん中宮之）
ばかうさせ給るりたといとそみやうよ（細 侍り給の西面之し子）
りひなすそぞうしくともおびひてあまれなし（細 夕霧息の人之）

法一ふそのことをきゝて
孟法師などいふさ女
のくすしの文ごどいと
ひてとゝし金言

世をそむきさる人の出
ずまよ　お尼ぎみ達の中よ
ぬかのおりふくうんす
をそり

（細）孟仮名乃

（細）孟仮名乃

（細）孟仮名乃

（細）孟仮名乃

お家の事とりけれそえ
つくく混乱りとく
おりひとりてんをおこしおも
ふがごい 三 初七日 三宝
あるさ人の指揮のもとに
バクリてつとめくるし
おさるく作しくり
三宝未来 母の
を尼 やるさまをそ
ひくりあり

孟 母 三 遷
孟母三遷 細 修験の事
るくるくさがごのやうに
ちくく おもひ出の
くるくふりそそぎ
るをいそいそして 孟母
ちくくぬされいお家
くことと 仰 仰
しくく出ませりさ
くく
抱のをもさそそ
細 修験の事
仰 ふいんと世をうと

孟母三遷 細 修験の事
よ。さるやうに
多べさ人の
よ。のて地そ
して とちく
三宝のいと
てをを言とふの
まて 唱 お家
ことくく
なちくく
よ。まるべく
まるべく作りのすちやをぞ法そで
うやちくんとのことまへべのおよ
うやちくんとのことまへべのおよ
なばりるくんとのことまへべのおよ

三宝のてとうく
孟仏の出家するまで
むくとうとく 仰 仏法
僧をと三宝をとそいつ
まも仏とりのく
とくちるるとうて
細 出家後 修験の事
るれもも孟母て青
ちるべごふとく 三一
品宮の市和のけな

の尼 細 事 尼の
中七日 尼
天還向 へーと

発心すれば之にて
仏を粗末にしてはならぬ
ある身と思へるてこれ
のことし それ孟
三千大千世界のものぞいふまで
しかるに我身を捨さ
らば出家の功徳は積まず
じきに身をなげ捨じと
きは一日一夜の出家の
功徳をしるべからずと
くわしく書たるの如く
おゐてはいはゞ人をは
孟 出家しては老少
後悔をしることと

世によそさる物とは世をはなれを
なりぬるをいふとぞされば
我人ともにそのよしを心得て
かりそめにも出家とする
こと我身を捨かぬるを
はなれて身を捨て世

ありがたく思し給ふゆゑ、誠にいみじく出家し
世のならひの風のまよひの人もはやく
されど女身をはなれぬことながら、
めでたく世の中をひとすぢにおもひて
出家をよくしれさをまてのちのちわかれ
世のことなどつねにさる世をはなれんとするぞお
いはゆる人さまは、世をはなれぬことを
ひとつしれで、いはずきはまりぬると
そひしられど、みなが今は心やすく
かれし。世によそさる物とはおもひけむなり
ぬることはいつしかでさることをもとむる
のあさきなかぞおぼえ給ひけり。つとめてん

まよひはれぬことなれば、いさゝか
らんを海ゑんもいとむつかしくおぼゆ
のちそのみはゝ世はなれさるやうに。
おもひけるさまぞかれさらともつくしき
しかいとそでつくろひ人もかれとすべく
ごとにつけてとつまかそく
しすてゝかへるとおもひて紙人をおひで
われものくりとちがするそうくし
うしぬ身とまつくすりくること
でさんさるそれば、秋よむひと
世あまりあはむ身をさひとのさ
けうこくいつさつけ給

よあり世ある絶ゆるあり
しこそ我身のさあはぬめて
されば人おの世はの心
はらねるの年もあれ
あるこれはそやつ、お嫁は
そのみちかはしこそがれて
むつしきみともいとそ
つくろへ人もなる
不徳のかしこさすくて
ちよ人わすれとし

またくとゆく人さん
さん 三 くるよ出ます
をくといさん人も気
とく

三 さけさるとは
鈍根の方人とく

多し傍生ならずや

此峯杣の名ぞとよふ　三ちと
此ひ合に見る名所ありて此峯
杣木よくく聞えしぐそ
葉の吹く錺へなし
今もてさりや　細　傍生の
何と峯杣が楯よ今ハ志
られわんとひしに
さりやあるまんとこ
とんまのし

まうの中より　孟　傍生
の楯錺女成仏のさとし
師　錺女成仏の少あしも
あれども中人の女など
とさうさ海しさうも
ならべしとく

うろくけうらそどころひやつまん
といとおしげなるん作するはびとよりは
まのんと抱くいふ傍生そてかりけ
けりまへハいうくさちぬよさきさへをしを　小峯楯杣
とうりくいさえんざりとを今ハ志かれ　旅人とあれ今をとて
ぬうんなど此峯楯の名ぞとふ志まとてさ　孟　傍生杣　孟さうさへなうて
りやとうしひ作らんおことるやむごとな
きうへなりハむすよりかくれも作しざやお　さうえん下にも田舎八田舎人のむさめとて
中への七をめも七さうさ海しうこしそいは　細　さ八めて田舎人の中々もさき人おりとて
らめまうの中よう仏ひまれ法ざいこ
そ作しめやさでへそて八つきうろうき海の
へまるん作りうろおどころて法ぞろ

つとうさき海の人　細　悪影の人
悪蘇ト瞋恚・憂愁・疑嫉・欲憍・慢諂・邪見等能忍不動是名法忍トやどとなさき
人さうしん句偈とまうしぞハつうろの疵行までうう形よせさんとし
師　名義集二晨援秦云忍トなり人よせうとん

その比さのきうり
細　浮舟の身さうへしと
中宮の志ひよろまつり
うくもおくぬてまさぶちさ
る人もあるまうま皆むけ
て　師　浮舟の身にうう
ぬ敵やうの我もおるまう
ま皆むけいひて浮舟のよ
くもおかうれ隠し悲ぶさ
彼宮法まそえしうえ
どめてうのさ殿おやしく
给しきうけるれバ中宮よ
お物先少しうと傍生の比
てとし

うろのりうりよきてうそまさんひと篠
ゆかしいうこの情ま人なう人もあうさこの　睍　小峯杣　睍　中宮のおうりよ
つうんよおやしそうをさう人とはさきと　俄よさせしと浮舟のうをとさうしく　まきらしとく
きまれハそれやあらんとハ志ひそれどさ　さるはハさとめてをとし
ざめるさしとうり傍生をぐうへ世するる　孟　浮舟の人よ　志も小峯杣が中へ
りのとも志まれじとようしもあらぬうさ　志うれどとするとし
きぶてうう人をあうやうよみりむけてう
りし悲び作らざてしのさ海のおやしさされ　浮舟の
ハ作ろのぞひしうを小峯杣の外りふとて　傍生の
バけつし作るなりとろ海うくもてそうしさ
るれバひとみもくうしてそうハそれみき　孟　少人中宮の包　孟　浮舟よ
ま海うくもそうしきるれ
ハ　傍生のうくさ成り
がるうりし見るれバふ
峯杣もなどまもししそ人
まうくうてぬとし

てゐるむ妙なり
松門に暁いたりて　細　陵園妾の陵をまもりてあるに手習君の有様能似たり
哥にも　河　松門暁到月徘徊　柏城尽日風蕭瑟　孟　是ハくいはそととへ月のおもしろきを
陵園妾ハ宮女なりしが君恩にもれてつゐに陵園の女となりてつくへしくを
手習君の山住に住給ふに似たり　哭　お允陵園妾とハ唐の八帝五崩御の時も陵のみさゝぎ
に宮仕の宮女を差てまもらしむる事をいふ也　柏ハ白氏文集で勤之　三　松門ハ松のまがきのかたち乃
門なるべし

冬ハひねもすふく風の
をとも　お　栢城尽日
風し
山かげハ　細　山伏の身なれば
しき嵐を何とも思
はずさとらぬえぐさ
しとし君も栢城終日
風蕭瑟の心にて此阪ま
の陵園妾の詞にそへり
みり
我も今ハ　細　手習の心にて
とゝる詞にて僧都ハをや
山への旅の事にふとき也

と法師なれど　いとくちをしくおぼすげ　細　手習の心
なる海のつらをかぞへて心ぼそう物をい
ひそせ給ふれは　なる秋の心ちも
そよふく風のおともいとゞ心ぼそきに　傍註
道し　しろ人も　哀山ぶしはかゝる山のそれぞれ　僧都之
ろなるうしとふをきて　我も今ハ山ぶ
しぞうしとこそりにとまりぬ涙なり　細　陰之　哭　僧都ハ山へのぼりぬとみゆ
まことにそへのうきみてもぞふるれバ
ろなるなら　孟　中将の君の事なり　のき　行ぞなりぬをとこ色て

こゝろにとまりぬ涙なり　師　ひたすらけしき　河　いづれとも見わく
ん山ぶしのまぶる涙ともふるまとそれ
山人の身なりとても
ひえの山人のかたち人も雲母
坂八瀬などらハおなじ
此の名にはかれまじと

ひたきこるすもいえんとて
手習君の尼になりしう
ちえなもいえんとて中将の
おりしゐるとて
紅葉のいと染をしるく
尼君の袖のあかゝの紅葉
なり
こよひとくらふけなる
人を　細　かゝりける人
おりても曲をあるまじ此
手習の君の下ゝかたらん
すゝてとも　師　手習

まことにまぶりて　西山へのぼる人なりと
てをかしきの心みはかまのひともいて
むさしなりふるいふうさうあ　孟　黒谷横山なり
あく法しのあと乃こゝまれくいつ
例のなぎさきつけるはおいかすくめづる　まゝの僧都をその手習君のいと
しきよこれ根をびしやかねなりなりう
ひたきことともいえんとてりのしろ　中将心
を紅葉乃いとゆりろくかのそれみなよ　もみぢ　かう
深ましろくておれハ入らうちぞ掛衣　中将のこと
すかさうるいとふうらげなる人を　細　師　尚役
こうけらつハおやちくぞ始めゆくさまと

さらしのうけるのの〻
あきらかなる
三 引手の穴丸

うちもうるんおやまうらの
やうは　孟中将まうり
出家をさせうるうとぞ
ふんし　三 手習を中将
のとうもづうるすを云
うるのおやまちのなるよ
後悔まうし
まのるりうさけつひもきこ
えぬべうれいのきぬ
お中将の穴よりのぞき
てうつこもおへぬさ母の
ささへぬべしともんぞれ立

ららもうとぞまづくらけ給ふん男いいら（お中将の心と床中まうく）
よることまうり給ひんとそて、さうべされ
あうりやおりきへさうしのうあかるののを
とるよ、おきさうろあれどぞし〳〵、まかざうう（孟中将よえ）
せんまあへ　へさ鳥下などふしやうまうりいとうくそど（三 中将の）（師 中将の心）
（手習をうくえて参るまでうる）
まずうとそきしいざしく、世よふさ母なり
うろへをとけ、げぢちうろんおやまちのや
うよ、おしとく、やしくへしうれいぼ川く
ことあへをぞ、袖ぐうろしさけへ、ひとこそ（しきうき手習のうへもこうえんとそ立のうとも）（細中将のうこ）（男 中将の香）
えぬべうれいのさねぐうのさ母しさ
おんをうしるひて、ぐるぬ人おうえんや、
まさその人の人乃むとめるんり云とこへ

のきさうかたう
その人の人れむまめ
おきそどのこころまうさ
お人のうせさうぬ法活
のおうべきとといろく
とまよ中将のくし

よのる丸も母よいおかりしで
ろうしとも　三 風流のう
さのむつびいは手習の係う
ま心うすもあるべし、庇よ如
また大ろさのむつびぞう
いろうしく、じ、ぶゑうよ
おおしまへとし、庇みえり
中将のりふ細し

まさ今ひとかみきしとうえへ
て　師 りもの心労を云れ

らどくれおうちりしい猫もんじちとく世を
そむきるよけうるなどそのづうしうくれるる
べき紙などおやうくぬてやふおまうり
ともううさ母しうへん人いぐらてそをか
おじしるど、中くとゞ和まうりて心ぐら
しろべきを、ちのびさうさ母よ祝ううら
ひとうてんとおへだ、まおやうよりてゆな
のつるのさ母よいはいしちぐうろとらもあ（細中将の句）
またんどうらさ母よ如活よさうるうんふや
そくることつべくろん何うさやうよをし
へやかまへごしうさりもれぐくてやうに（細古姫君のまうれうことみとし）
まうろうよおる今ひとつ心ざしとそえへ

つゞりて見まほしきこ
とども也

ひさかたの月の古こと　細君
の伝法亭の母とあり是
日本にて古の母の孝経と
なる人にし紀貫之がいをと
うとかりし智恵のま
まなのうたいはるゝを

えまもらうけ　細君尾張の
との先君おもとし
孟母とくれされば此
尼さい孝経の名方をも
てけぐしとて

むかしくの待るよふ
らひてきん　お国より
かりていい日此人なれど大
やけりおほくゝて見へま

まよし月もるゝ待つよはやさらぬ物し給
いぐ様い一家とともそれがらはなちて
給つれ孝経のかの名にとしつれゆゑ給
ふかきよいかりしとあるべしと月よぞ
へては人づれてよわすれなるこのことわり
てるかひさうはいとうちなるをとゞれゆゑ
給いざありうえまもらつけ給ふ給ふ姫り
うんしまふかのまよけがおやの名をあい
をおいまはれよきさいかやぎきらの
がらて日ごろよ待ちあうよ恐ゆやけぐるの
いとまうけくむつらくのこ待ようづくひ
てらん暁日をまふらんとおくまへしなど。

いつゝつのとをさあいわくろ
そすと紀行あるがりて

むかしこの女乃さる
ぞく　お紀行あるところ
ふ細し女の住寂来八法
あの村布施物の料
一ぶらてこし
お一飯調もうるわり受飯
よ保持るまゝくい紀行者
も菩の家人ゝるそし

太夫ねどの宇治よ此ゝもし衣ともよつ
うまつりて有八文のもとと給し東よ此そ
しく日暮し給し有文の名にむさかよう
しひ給しを見へ一とうわいしせふせ給ます
その名おとうしまさ母びてもへさぞまろ
ひもまうけるとをもとの妻子と給よされど
その名をもてのわざをもせ給ひしのまま
のつとしるんきらぐきこしの給をそておる
ごとうの女乃すうしぞくひとぐりてこし
待るぐさおもせ給てんや。とゝおぐべきあ
いいそぎをもせ待りるんとりつきぞくよ。
いぐくう義あすゝげん人やあやしとこん

おくつひのりよつけて
おそひあれバうてなくれど
そよともねとこ猶ふそ
いうとも

うちうしろしい
細大略 叙爵などうふ
ことをいふ
八位の
蔵人とそくらゐ五位の
昇殿をゆるされて
孟拾遺ぐらゐにて
てさうらふ
孟拾遺ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将曹などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて

大将をさうらふ中の将
をすけと将監ハせう
将曹をさうらふ
孟将監ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将曹などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて

細大略 叙爵などうふ
ことをいふ
八位の
蔵人とそくらゐ五位の
昇殿をゆるされて
孟拾遺ぐらゐにて
てさうらふ
孟拾遺ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将曹などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて

大将をさうらふ中の将
をすけと将監ハせう
将曹をさうらふ
孟将監ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将曹などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて

大将をさうらふ中の将
をすけと将監ハせう
将曹をさうらふ
孟将監ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将曹などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて

細大略 叙爵などうふ
ことをいふ
八位の
蔵人とそくらゐ五位の
昇殿をゆるされて
孟拾遺ぐらゐにて
てさうらふ
孟拾遺ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将曹などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて

大将をさうらふ中の将
をすけと将監ハせう
将曹をさうらふ
孟将監ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将曹などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて
ゆるされて
近衛の
将監などさうらふ
孟蔵人ぐらゐにて

其以後梵天帝釈四天王忠仁公日光月光菩薩宇治殿白十二神將御堂殿白
被造剏之ヲ